

Title	短期交換留学プログラムにおける地域連携型PBLの実践と課題
Author(s)	立川, 真紀絵; 小森, 万里; 岩井, 茂樹
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2022, 20, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87456
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

短期交換留学プログラムにおける地域連携型PBLの実践と課題

Practices and Issues of Regional Cooperative Project-based Learning in Short-term Exchange Program

立川 真紀絵・小森 万里・岩井 茂樹

【要旨】

大阪大学日本語日本文化教育センターの短期交換留学生プログラムであるメイプル・プログラムでは、「ほかの文化の人たちや社会とつながることができる」人材の育成を目的とし、地域の市民団体、近隣の企業、大阪大学内の他部局との連携のもと、居住地域の課題を発見して、その解決に向けて何をすべきかを考える未来志向のPBLを取り入れた授業を行っている。本稿は2020年度春～夏学期のPBLの実践における成果と課題の報告である。留学生、および発表会に参加したゲストへの事後アンケート調査の結果、留学生たちが主体性や積極性をもってPBL活動に取り組んだこと、市民団体の方々や他部局の教員と日本語で関わる機会を設けられたこと、留学生が地域社会に深い関心を持ったこと等が大きな成果であるとわかった。一方、当事者意識をもって課題の解決方法を探すという点で課題が残り、今後、「探究から学ぶ」「他者から学ぶ」「過去から学ぶ」といった学ぶ姿勢の構築という面での改善が求められる。

1. はじめに

1.1 背景

大阪大学短期留学特別プログラムの一つであるメイプル・プログラムは、日本語日本文化教育センターがデザインしたプログラムである。このプログラムは日本語・日本文化を専修で学ぶことを目的としており、座学だけでなく体験を通しての学びを重視している。そのため、実地見学や見学旅行等における体験を教室での学びに連結させ、日本の文化や社会についてより深く学べるようなプログラムにデザインされている。しかし、1年間という短期の留学であるために、その滞在期間の短さから、留学先である箕面という地域社会との関係構築の面で課題があった。

地域について留学生が学ぶ実践にはこれまでも様々なものがあり、地域の地場産業や文化財への関心、地域の魅力の発見、地域社会との交流等につながっていることが報告されている(山中他2020、村越2021、森尾2021)。しかし、恒松(2017)が、「顧客的存在」として留学生が日本社会と関わる場合には優勢な日本文化パラダイムが揺らぐことなく行事が進んでいくと指摘しているように、留学生と地域との交流は、既存の枠組みに留学生が「一時的訪問者」という形で受け入れられるにすぎず、長期に渡る関係構築に至らない可能性も考えられる。留学生が地域社会に「ソト」の存在としてではなく同じ市民として受け入れられ、真の意味での両者の関係構築を図るのであれば、留学生が地域を自分に引きつけて捉え、他方、地域社会にも留学生の発信が自分事として受けとめられていくような関係性が望まれるのではないかと考えられる。このように、留学生と地域住民の双方が箕面について学び、互いの知識や観点、考えを交換することを通して、将来的には共に新しいパラダイムを構築していくことができるような教育実践につなげられないだろうか考えるに至った。

1.2 メイプル・プログラムの課題と本稿の目的

1.1で述べた背景から、本プログラムでは、地域社会について学び、地域社会との関係構築を目指した課題解決型学習（Project-based Learning, 以下、PBL）を必修科目の中で行うことになった。PBLを導入しようと考えたのは、本プログラムについて3つの課題があったためである。

1点目は、1年間の短期留学であるために、「一時的訪問者」としての留学生活になってしまうことである。これまで本プログラムとして年に複数回の実地見学や見学旅行、体験教室等を行い、日本社会や日本文化を実地で学ぶ機会を設けてきたが、留学先である「箕面」という地域について学ぶ機会がなく、地域社会とのつながりが持てないまま留学期間を終えることになり、本プログラムの留学生からも「1年間ここで生活したけれど、結局私はお客さんでしかなかった」という声を聞くこともあった。そこで、地域についての理解を図るために、地域をテーマにした取り組みを行うことを考えた。

2点目は、2021年4月のキャンパス移転による新たな関係構築の必要性である。旧箕面キャンパスでは1979年の開設以降、約40年をかけて少しずつ周辺の地域社会に留学生が受け入れられてきていたが、キャンパス移転により、一から新キャンパス周辺の地域との間で相互理解を深め、関係を構築する必要性に迫られることになった。ちょうど同時期に、産官学民連携により町づくりのPBLを実践している本学COデザインセンター（以下、CSCD）の教員を通して箕面観光ボランティアガイド（以下、MVクラブ）や箕面公園管理事務所との出会いがあった。数度にわたってCSCDの教員、MVクラブ、箕面公園管理事務所との打ち合わせを行うことにより、まずは本プログラムの教員が箕面の町づくりに関わる人々とつながり、信頼関係を築いていった。そして、このことが地域社会とともに留学生教育を進める基盤づくりにつながっていった。

3点目は、2020年からのコロナ禍によって従来のような実地で学ぶ経験の場を提供することができなくなる等、行動が制限された中で、本プログラムが目指す学びをどのように実現させることができるのかを模索しなければならなくなったことである。そこで、遠方へ出かけなくとも、留学生の日々の生活での体験や気づきを学びにつなげ、日本語・日本文化への理解をより深めるという本プログラムの目的の達成につなげる新たな取り組みとして、箕面に住む留学生の視点や経験を生かして地域の課題を発見し、解決方法を模索する活動を行うという形をとることになった。

このように3つの課題の解決を目指す中で、箕面をテーマにすること、地域住民による留学生教育への参加を促すこと、留学生生活を生かした課題解決型の授業を行うことが構想され、本プログラムの必修科目である「日本語日本文化専門演習（以下、MDR）」で、PBLを取り入れることになった。

本稿の目的は、2020年度春～夏学期の実践についてのアンケート調査に基づいて、本PBL活動の成果と課題を報告することである。学期終了時に行った留学生に対するアンケート調査の結果から留学生の取り組みについて分析し、発表会に参加したゲストに対するアンケート調査の結果から今回のPBL活動に対するゲストの評価について分析する。

1.3 メイプル・プログラムにおける「日本語日本文化専門演習科目（MDR）」の位置づけ

図1はメイプル・プログラムの全体像を示したものである。本プログラムでは参加留学生が

日本語や日本文化に関する様々な科目を各々の興味関心や知識、日本語レベル等に応じて選択するが、唯一すべての留学生在が履修しなければならない必修科目がMDRである。この科目を通して、「知る・話し合う・伝える」という3つのコミュニケーションスキル¹⁾を伸ばし、他の文化の人たちや社会とつながることのできる人材を育成することが本プログラムの目標である。

2020年春～夏学期のMDR科目では、留学生在が地域社会の一員として、地域の課題を発見し、課題の解決方法を見つけ、発信をする力を養うためのPBLを取り入れることになった。

1.4 PBLの特長

上述のPBLのテーマは「箕面らしさの探究」である。箕面の歴史、自然、文化、社会のうち、留学生在たちが興味のあるテーマを選んで箕面らしさを探究し、見つけた課題の解決方法を考え、適切な形で発表、発信するもので、様々なつながりを重視してデザインした点が特長である(図2)。

1つ目は、専門家とのつながりである。まず、地域の専門家としてMVクラブの協力を得ることにより、地域に関する知識や地域に住む人々の考え方に対する留学生在たちの理解の深化につなげている。また、PBLの専門家として産官学民連携教育に詳しいCSCDの教員と連携し、地域の人々との関係構築の際の仲介やPBLの進め方の助言等を得ている。

2つ目は、時間的なつながりである。本プログラムのPBLは1年ごとに完結させるのではなく、前年の留学生在の成果をふまえて翌年の留学生在がさらに探究を深め、プロジェクトをよりよいものにしていくという未来志向の取り組みを目指している。

3つ目は、世界とのつながりである。本プログラムには毎年20以上の国・地域からの多様な留学生在が参加しているが、この多様性を活かし、留学生在のルーツの国や地域と比較しつつ、留学生在の視点で箕面という地域を見つめ、各留学生在の得意なことを生かしながら箕面について探究することが本プログラムのPBLでは求められる。

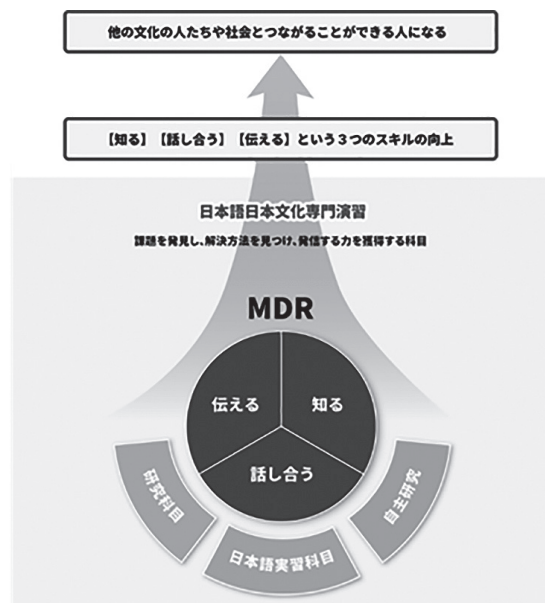


図1 メイプル・プログラムの全体像 (Maple Program HPによる)

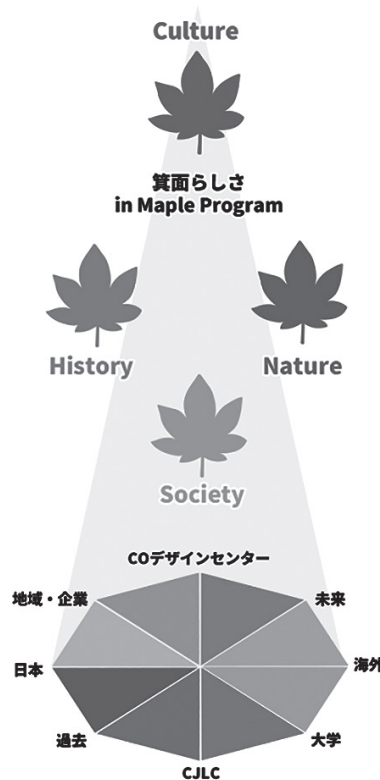


図2 PBLのイメージ (Maple Program HPによる)

2. 2020年度春～夏学期の授業の概要

2020年度春～夏学期は76名の留学生が8クラスに分かれ、各クラス内で3～5名のグループを作ってPBL活動を行った。各クラス・アドバイザーが留学生の日本語レベルや知識に応じてクラスごとに授業を行ったが、発表会のみプログラム全体で行った。

表1は全15回の授業内容であり、表中の下線部が地域の市民団体や大阪大学内の他部局との連携により実施した授業である。

表1 2020年度春～夏学期の授業内容

回	内容【主な内容】	授業形態
1	クラス活動【オリエンテーション】	オンライン
2	クラス活動【CSCD教員作成の事前講義動画「箕面PBLの基礎的説明」の視聴】	
3～6	クラス活動 【動画に基づくディスカッション、箕面探究の観点の学習、グループ分け（3～5人グループ）、テーマ決め、MVクラブへの質問（メール）】	
7～9	クラス活動【グループ活動、CSCD教員のサポート】	
10	クラス活動【グループ活動、発表に向けての準備】	
11～13	プログラム全体の活動【オンライン発表会、 <u>市民団体・企業・他部局の参加</u> 】	ハイブリッド
14～15	クラス活動【ふり返り、ループリックによる評価、アンケート】	オンライン

15回中、11回はMVクラブあるいはCSCDの教員が関わり、多様な人々が参加する授業となった。

第1回の授業で本科目についてのオリエンテーションを行った後、第2回の授業では、CSCDの教員による動画「箕面PBLの基礎的説明」を各クラスで視聴し、箕面についての基礎的な知識を得るとともに、CSCDの教員が作成した「箕面についてのキーワード」から箕面を見る様々な観点を知る活動を行った。クラスによってはこの動画を第3回以降の授業でも使用した。

第3～6回にかけては、留学生たちが箕面について調査する中で出てきた疑問をMVクラブに質問する機会を設けた。当初は箕面公園への実地見学を行いMVクラブの方々案内をしてもらう予定であったが、コロナ禍で中止となったため、急遽、メールによる質疑応答という形に変更した。76名の留学生たちが一斉にMVクラブにメールを送ることは両者の作業が煩雑になることが予想されたため、留学生たちの質問を各クラス・アドバイザーが集約してMVクラブの代表に質問を送り、MVクラブ代表が質問の内容に応じて、そのテーマに詳しいガイドから回答を回収の上、回答資料を作成し、各クラス・アドバイザーに送付してくださった。留学生たちの多くの質問に対し、MVクラブからは質問のメール送付後1週間ほどで回答資料が届き、留学生たちはその回答内容を各グループのプロジェクトに迅速に活かすことができた。

第7～10回の授業は各グループが成果物を作っていく段階である。特に、第7～9回は本プログラムの教員やTAに加えてCSCDの教員も各グループの活動を見守り、プロジェクトの進行に行き詰まっているグループに対して助言やファシリテートをした。この活動では日本語・日本文化を専門分野とする本プログラムの教員とは異なる視点からの助言をCSCDの教員から得た。

第11～13回は3週間にわけて発表会を開催した。発表会はオンラインで行われ、留学生たちは各自寮の部屋から接続したが、インターネット環境やPC操作に不安がある留学生は教室に来

て、教室に設置されたPCを使用して発表を行った。発表会にはMVクラブ、箕面公園管理事務所、近隣の企業の方々、他大学や CSCD の教員を含む学内の他部局の教員等をゲストとして招き、各グループの発表に対する質問やコメント等を得た。

第14、15回はPBL活動を通して学んだことについてグループでディスカッションし、PBL発表会および春～夏学期のMDRについてふり返りを行った。

2020年8月13日～18日には、旧箕面キャンパスCJLC多目的ホールにおいて成果物展示会を行った。コロナ禍であったが、成果物間の距離をとって展示し、消毒液を複数箇所設置する等、感染対策を徹底することにより、PBL活動で留学生たちが制作した作品を来校した留学生や教職員が観覧する機会を設けることができた。各グループの発表題目と展示会で展示された成果物の一覧を表2に示す。

表2 PBL発表会の発表タイトルと成果物の形

発表タイトル	8月展示会の成果物
箕面と猿の知られざる戦い	動画
お金持ちになりたかったら龍安寺へ！	パンフレット、スライド
箕面の可愛い？怖い？虫図鑑	図鑑、スライド
箕面温泉多言語観光プラン	パンフレット
勝尾寺歴史探訪	動画
五感で楽しむ箕面公園—紅葉を例に—	パンフレット、スライド
大阪モノレール、人へ、街へ、空へ	パンフレット
箕面公園へ行ってみよう！—梅雨時の楽しい過ごし方—	webサイト、スライド
漫画で箕面の勝尾寺とだるまの関係を知りましょう	マンガ、スライド
柚子から箕面の風土を知ろう	パンフレット、スライド
昔と現在をつなぐ鉄道	スライド
箕面観光を楽しもう	パンフレット、スライド
箕面のアピール	翻訳、スライド
火曜から昼ふかし「箕面の滝という件」	動画、スライド
葉っぱって食べれるん？	スライド
隠れた箕面公園の魅力	動画、スライド
山の旅—イントゥザマウンテン—	動画
勝尾寺探索—意外な発見—	動画、スライド
箕面で食べに行きましょう！	スライド
箕面の自然を安全に楽しむ	スライド
箕面公園の散歩マップ—留学生の視点から見た魅力的なスポット—	マップ、スライド
箕面の香り—誕生から商品までのゆず物語—	スライド
箕面温泉の物語	スライド

表2のとおり、いずれのグループも箕面の自然や歴史、文化、社会等に注目したプロジェクトであるばかりでなく、動画、webサイト、マンガ作成等、留学生の特技を活かしたプロジェクトにもなっていた。また、多言語を駆使した成果物等、留学生であることを活かしたプロジェクトもあった。

3. アンケート調査の概要

表3は留学生とPBL発表会のゲストに対してそれぞれ行ったアンケート調査の概要である。

表3 アンケート調査の概要

	留学生に対するアンケート	ゲストに対するアンケート
調査日	2020年7月28日、8月4日	2020年7月7日～28日
対象者	本プログラムの留学生76名中75名	発表会に参加したゲスト延べ23名
実施方法	大阪大学のLMS (Blackboard)	Googleフォーム
目的	PBL活動に対する留学生の自己評価の収集	PBL活動や留学生に対するゲストの評価の収集
内容	自分の取組み方への評価、活動全体に対する評価	発表会の運営・開催方法、活動全体に対する評価
質問	全12問	全6問

留学生に対するアンケートでは、本プログラムの留学生76名を対象とし、PBL活動に対する自己評価を収集する目的で行い、75名から回答を得た。調査の内容は自分の取り組みや活動全体に対する評価についてで、全12問の質問をした。ゲストに対するアンケートでは、発表会に参加した延べ23名を対象とし、PBL活動や留学生への評価を収集する目的で行った。調査の内容は、発表会や活動全体に対する評価であり、全6問の質問をした。

4. 分析と考察

4.1 留学生に対するアンケート調査

3で述べたように留学生に対するアンケート調査は、選択式質問9問と記述式質問3問の全12問から成る。表4に選択式質問一覧、表5に記述式質問一覧と、それぞれの回答率を示す。なお、選択式質問の選択肢はすべて「そう思う」、「まあまあそう思う」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」であり、そのうち肯定的評価である「そう思う」と「まあまあそう思う」を合わせた割合が高かった順に表示する。

本節では留学生の取り組みについて、選択式質問の結果に基づいて分析を行い、記述式質問（以下、自由記述）の関連する回答を取り上げながら考察を進める。自由記述の回答を取り上げる際は、表5中の「番号」をデータの前に付して示す。なお、自由記述のデータは留学生の回答の表現をそのまま記載し、明らかに日本語の誤りが見られる場合も修正は加えていない。

表4の結果に基づき、以下では3つの点について論じる。

1点目は、全体的にすべての質問において肯定的評価が約8割に上り、多数を占めた点である。この結果から、今回のPBL活動における留学生による自己評価は総体的に高かったことがわかる。自由記述にも、上記の肯定的な評価の高さが窺える記述が複数あった。「1）PBL活動は良い活動だと思います。みんなで話し合った機会ができました。箕面のことをもっと知って

ます(ママ)」、「1) グループの活動は個人の活動よりも大変な場面が少しありますが、みんなの得意なことを合わせながら、面白いプロジェクトを作るようになりました」のように、今回のPBL活動を高く評価する意見や、有意義であったと考える意見が散見された。

表4 留学生に対するアンケートにおける選択式質問（肯定的評価の割合）

番号	質問	肯定的評価の 選択者数(割合)
1	あなたはPBL活動に主体的に取り組みましたか	73名(97.3%)
2	あなたは準備した成果を十分に発表しましたか	72名(96.0%)
3	あなたはグループ活動に積極的に取り組みましたか	72名(96.0%)
4	あなたは発表会までの計画を適切に立てましたか	71名(94.6%)
5	あなたは十分に準備して作文(作文集 ²⁾)を書きましたか	65名(86.6%)
6	あなたはPBL活動で自分の特技(得意なこと)を活かしましたか	64名(85.3%)
7	あなたはPBL活動を楽しみましたか	62名(82.6%)
8	あなたはCOデザインセンターの先生方と、話したいことがあった時に話しましたか	59名(78.6%)
9	あなたはボランティアガイドの方々に、聞きたいことがあった時に質問しましたか	58名(77.3%)

表5 留学生に対するアンケートにおける記述式質問

番号	質問	回答者数(割合)
1)	今回のPBL活動について、特によかったところや改善点(直したほうがいいところ)があれば、書いてください	49名(65.3%)
2)	今回のPBL活動をしてみてどう思いましたか。感想を自由に書いてください	57名(76.0%)
3)	PBL活動に協力して下さったボランティアガイドの方々、COデザインセンターの先生方にメッセージをお願いします	52名(69.3%)

2点目は、特に主体性や積極性に関する3つの質問(「1 あなたはPBL活動に主体的に取り組みましたか」、「2 あなたは準備した結果を十分に発表しましたか」、「3 あなたはグループ活動に積極的に取り組みましたか」)において、肯定的評価がいずれも90%以上と非常に高い割合を占めた点である。ここから、留学生たちがやる気をもって主体的、積極的に今回のPBL活動に取り組んだことがわかる。自由記述においても関連する箇所があり、「2) 一方的に先生方からの教えを受け取るのではなく、積極的に先生方の誘導から、自分の目で問題を発見して解決するのはとても面白くて印象的でした」、「2) 秋～冬学期ではテーマをくれて、発表して、練習することができました。この春～夏学期では今回のPBLを通じてテーマの自由度が高くなって、自分の得意なことを活したり、好きなことを調査したりすることができるので、とても楽しかったです(ママ)」のような意見が挙がった。ここから留学生たちが、教員に教えられるだけではなく、自ら問題を見つけるという自由度の高い活動に参加することに楽しみや面白みを見出していることがわかる。そのような活動に興味や関心を抱いた結果、意欲的にPBL活動に参加することができ、表4にある主体性や積極性を問う質問において特に高い評価が得られたの

ではないかと考える。学期当初は、PBL活動という今回の新たな取り組みに留学生がどの程度の関心をもつのかについて予想しにくい部分があったが、結果的には、自ら課題を発見して解決方法を考えるという自由度の高い活動に留学生が意欲的に参加できたことがわかった。

そして3点目は、表4の「8あなたはCOデザインセンターの先生方と、話したいことがあった時に話しましたか」、「9あなたはボランティアガイドの方々に、聞きたいことがあった時に質問しましたか」という質問の肯定的評価が7割後半であり不十分であるとは言えないものの、相対的に見るといずれも若干低いという点である。他の質問の肯定的評価がすべて8割、9割を超えていることに鑑みれば、改善の余地があると言える。MVクラブの方々やCSCDの教員と、自分が思うように話をしたり積極的に関わったりできなかった留学生も一定数存在することが考えられる。

一方で今回、留学生たちが日頃全く関わりのない市民の方々や他部局の教員と関わる機会を設けられたことは大きな成果である。自由記述では「1）私は今回のPBLは非常に良かったです。COデザインセンターの先生の手伝いをくれたり、十分な時間もくれたりするので、とても良かったですから、改善点は私にとってないと思います(ママ)」、「3）PBL活動に協力して下さったボランティアガイドの方々、COデザインセンターの先生方、どうもありがとうございました。皆様のおかげで、私は役に立つ面白い経験がありました。プロジェクトの途中で時々分からないことがあったら、皆様はすぐに説明してくれたり、新しいアイデアを浮かべられることも手伝います(ママ)。本当にありがたいです。今回の活動を通じて学んだ知識やスキルは本当に役に立つと思います」のように、MVクラブの方々やCSCDの教員にサポートをしてもらったことがPBL活動に役に立ち、自分の学びにつながったという意見も複数見られた。今回の活動を通して、留学生が日常で関わる日本語学習のコミュニティを超えて、日本語を使用して他者と交流する貴重な機会を学習者に提供できたと考える。今後、より多くの留学生がMVクラブの方々やCSCDの教員の方々とはより積極的に交流をしていけるよう、方策を検討していきたい。

4.2 ゲストに対するアンケート調査

ゲストに対するアンケート調査は3.1で述べたように全6問から成る。「発表会はいかがでしたか(とてもよかった/よかった/あまりよくなかった/よくなかった)」、「今回のオンラインツールで発表会を開催したことで、不都合な点等はありませんでしたか(不都合な点はなかった/不都合な点があった)」という2問の選択式質問の他、表6に示した4問の記述式質問がある。表6の回答者数は延べ人数である。

本節では今回のPBL活動に対するゲストの評価について、自由記述の回答をもとに分析、考察を行う。自由記述の回答を取り上げる際は、表6中の「番号」をデータの前に付して示す。

表6 ゲストに対するアンケートの質問

番号	質問	回答者数
1)	どんな点がよかった/よくなかったですか	22名
2)	不都合な点があった場合、それはどのようなことでしたか	13名
3)	今回の発表会について、ご意見やご感想をご自由にお書きください	23名
4)	留学生に向けて、コメントをいただければ幸いです	23名

自由回答のデータに基づいて、以下では3つの点について論じる。

1点目は留学生の問題の捉え方や発表方法に対する肯定的評価が多く見られた点である。問題の捉え方については、具体的には、「1) 何故、そのテーマを選んだのか?をしっかりと説明した上で、留学生にとって身近な問題として調査をしていた。視点の違う見方や発表は大変面白かったですし、成果物である作品も、次に繋がる楽しみとなると思います」のように、留学生にとって身近な問題が取り上げられていたことや、留学生のユニークな視点が興味深かったというコメントがあった。また、「1) ビジュアルで訴えるなど成果を分かり易く表現していた。テーマを分担し全員参画が見てとれる」、「1) 7月14日の発表はそれぞれ焦点が絞られていて、各発表者の思い、意見が明瞭に表れていました。柚子、モミジ、鉄道など身近なところに焦点を当て、発表者の関心も高かったのかもしれません。テーマを通して地域の観光、経済振興をうまくとらえていたと思います。さらにそれぞれの母国に振り返って発表に取り入れるなど工夫されていました」のように、発表方法を評価する意見もあった。特に、留学生自身の出身地と箕面市との比較はゲストにとって新たな情報であり、発表において工夫した点としてゲストから評価されたと言える。

2点目は、地域社会と留学生との関係を今後も維持していくことへの期待が寄せられた点である。例えば、「4) 箕面の滝や歴史・文化をガイドしている私達が気がつかない視点で発表されたことも多くあり勉強になりました。機会があれば皆さんと復習を兼ねて一緒に歩ければ嬉しいと思います」というMVクラブの方からの回答があった。今回は、箕面公園での実地見学はコロナ禍の影響で実現しなかったが、今後、そのような機会が設けられることを望んでいるというものである。その他にも、「4) 今日はA社について発表いただき誠にありがとうございました。Bの魅力についても調査いただきたいと存じます³⁾。これを機に当社と交流を深めることができれば幸いです。今後ともよろしく願いいたします」のような、企業の方からの回答もあった。自分たちの企業について留学生が探究し、その成果を発信するということが企業の方に非常に好意的に受け止められている様子がわかる。これらの回答から、今回の発表会での一回限りの関わりにとどまらず、これを契機として継続的に留学生と交流していくことがゲストから期待されていると言える。

3点目は、留学生が地域社会を理解することについての意義が指摘された点である。例えば、「3) 単に語学を学ぶだけではなく、多様な文化背景をもった留学生が地域を深く知ることが、いかに重要か、学生の努力をみていて再認識した」のように、地域について学んで関心を持つことは、その地域で生活する留学生自身にとって重要であるという回答が見られた。それに加えて、「4) 色々な視点で箕面について調べて、提案していただきました。改めて箕面の魅力を知る機会になりました。ありがとうございました」のように、留学生によるPBL活動がゲストにとっても地域について改めて知るよい機会になったという回答が見られた。つまり、留学生が地域に対する学びを深めることが、留学生だけでなくゲストにとっても有意義であったという指摘である。この点は1.1で述べた通り、留学生が地域を自分に引きつけて捉え、地域社会にも留学生の発信が自分事として受けとめられていくような関係性を目指して始まった本PBL活動において重要な成果であると言える。

5. まとめと今後の課題

短期留学生を教育対象とした本プログラムにおいて、本PBL活動実施以前は、留学生が日本語学習のコミュニティを超えて人と交流したり、学習活動をしたりすることは決して多いとは言えなかった。留学生は、日本で実際に生活しているとはいえ、あくまでも「一時的訪問者」という実感しか得られなかったのである。

今回、上記のような試みを行い、またアンケート調査の結果から、以下の2点のことが言えるであろう。

1点目は、MVクラブをはじめとする地域の事情に詳しい人たちと、日本語で交流できたことである。とりわけMVクラブの方々は留学生が学習、生活をしている箕面という地域の歴史や自然、文化、社会等を詳しく知っており、そうした地域の方々に実際に日本語で質問できたことは、彼らにとって非常に貴重な体験になったであろうし、自信にもつながったのではないかと考えられる。

2点目は、留学生が地域社会に深い関心を持った点である。アンケート結果からもわかるように、箕面に関するをもっと詳しく知りたいという意見が多く見られた。機会があればMVクラブの人たちに別途ガイドをしてもらいたいという意見もあった。こうしたことから、留学生が単に「一時的訪問者」に過ぎないという留学生たちの意識が変化したことがわかるだろう。つまり、自分たちも箕面市民の一員により近接しようという意識の変化が垣間見られるのである。この意識変化は成果として大きく、PBL活動の目的の1つを成し得たものであると言えるだろう。

以上2点が今回のPBL活動で得られた大きな成果であると言えよう。

今後の課題としては、以下の3点が挙げられる。いずれも「学ぶ」姿勢の構築に関するものである。

まず1点目は、「探究から学ぶ」姿勢をどう構築していくか、という点である。実際、彼らは日本には強い関心があっても、箕面という一地域にはそれほど関心がない。おそらく、箕面があまりにも身近であり、またそれが日本を代表する土地だと言えるのかという疑念が払拭できないからであろう。それを深く探究したところで、果たして日本というものがわかるのか、という疑問が留学生たちにはあるのだと思われる。この疑念や疑問を払拭し、探究によって、箕面という地域を知ることが最終目的なのではなく、箕面を知ることが日本を知ること、あるいは世界を知ること、現代社会を知ること等、より大きなことにつながることを理解させる必要があるに違いない。この理解を促すためにはどうした方法が考えられ、実践できるのか。これが1つ目の課題である。

2つ目の課題は、「他者から学ぶ」姿勢の構築である。留学生は自分の発表を良くするためには努力を惜しまない傾向にある。だが一方で、他者の発表には関心が薄い傾向になるのもまた事実である。この他者に学ぶ姿勢を構築していくためにどうした方法が考えられるのか。これが2つ目の課題である。

最後は、「過去から学ぶ」姿勢の構築である。今回の試みは、まだ初年度ということもあり、成果物が蓄積されていないというのが現状である。今後、PBL活動を続けていく上でも、また探究を進めていく上でも、過去の成果物をどのように活用していくのかが大きな課題となる。どのように過去の成果物を蓄積し、留学生に見せ、活用していくのか。これが今後、より大き

な成果を導く重要な要因になってくるであろう。

今回の実践により、以上のような課題が浮き彫りになった。今後、より密接な地域との関わり、より深い他者との関係性の構築、より効果的な過去の成果の活用等の諸点を改善していくことで、1年という短期留学生プログラムにおいて、より有意義で効果的な地域連携型PBLを実践していくことが期待される。

注

- 1) 「知る」「話し合う」「伝える」は、NSFLEP (1999), Shrum, J. L., and Eileen W. G. (2010) における3つのコミュニケーションモード (interpretive communication, interpersonal communication, presentational communication) を参考にしている。
- 2) 留学生はグループの活動としてPBL活動を行い、個人の活動として「私が見つけた箕面らしさ」というテーマで作文を書いた。留学生から提出された作文は作文集にまとめた。
- 3) 発表会に参加したゲストの社名に関わる内容をアルファベット (A社, B) に置き換えた。

謝辞

本PBL活動の実践に際し、箕面観光ボランティアガイド、箕面公園管理事務所、発表会にご参加くださったゲストの方々、および大阪大学COデザインセンターの先生方に、様々な場面においてご協力いただいたことをここに深謝いたします。

参考文献

- 恒松直美 (2017) 「多国籍留学生の国際的体験学習における日本の学校文化との接触—多文化共生の課題と教員の教育的介入—」『広島大学留学生教育』21, pp.1-16
- 村越純子 (2021) 「小川町にぎわい創出課との連携による地域教育—留学生対象「日本文化研修Ⅰ」における学外授業—」『地域と大学—城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要』1, pp.28-38
- 森尾貴広 (2021) 「〈事例紹介〉マンガでトランスボーダー：マンガであなたとつくばと世界をつなごう！—マンガ創作を通じた留学生と地域市民との交流—」『ウェブマガジン 留学交流』117, 独立行政法人日本学生支援機構, pp.30-35
https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2020/_icsFiles/afieldfile/2021/02/17/202101moriotakahiro.pdf (2021年12月24日)
- 山中智成・パウベククス ジャンサヤ・大塚晃・唐木宏一・杉本等 (2020) 「留学生視点の新潟県についてのアイデアソン 実施記録—留学生の留学生による留学生のためのアイデアソンin新潟—」『事業創造大学院大学紀要』1, pp.171-184
- Maple Program ホームページ <https://maple.cjlc.osaka-u.ac.jp/> (2021年12月24日)
- NSFLEP (National Standards in Foreign Language Education Project) (1999) *Standards for foreign language learning in the 21st century* (聖田京子訳『21世紀の外国語学習スタンダードズ』『日本語学習スタンダードズ』日本語版発行：国際交流基金日本語国際センター)
https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/syllabus/pdf/sy_honyaku_9-2USA.pdf (2021年12月24日)
- Shrum, J. L., and Eileen W. G. (2010) *Teacher's Handbook: Contextualized Language Instruction*. 4th ed. Boston: Heinle and Heinle.

(たちかわ まきえ 本センター講師)
(こもり まり 本センター准教授)
(いわい しげき 本センター教授)